

「第1回なるほど栗山学」講演要旨 講師 / 横田直成氏

2月8日(木) 18:30~21:00 「栗山隠れた!? 先人・偉人伝」



導入(阿部司会者より)

「なるほど栗山学」という名称は、とことん「なるほど…」と思えるまで議論を進めて欲しいという、町担当者の思いが込められているようです。この事業は、企画の段階から、栗山オオムラサキの会の高橋さんや、本日講師の横田さん、そして、私も参加して議論を交わしながら進めてきました。本日から始まる全4回の講座は、「町の先人・偉人や、今を生きる町のプロフェッショナル」に出会うタベであり、彼らの生き様・体験談をとおして、今後の自分自身の個々の生き方を考え、10年、20年先の将来のまちづくりを考えるきっかけとする場です。また、各分野の栗山人をとおして、産業、教育、文化、行政などの町の歴史ドラマを知る機会ともなります。

参加者を30名とした意図は、「突っ込んだ議論」をする場であるということです。心から「なるほど」と思える場となります様、皆さんの主体的な参加の中で講座を進めたいと思います。

講演にあたって

私は栗山町に来たのは平成6年4月です。12年ほどしか経っていません。その私が今回、栗山町のことをお話しするのは大変無礼なことと感じていますが、過去にたまたま、町史編纂のお手伝いをした経緯があったことから依頼を受け、恐縮ながらお話をすることとなりました。今回の事業の名のとおり、「なるほど」と思っていただけのこと、「えっ!?!」と驚いていただけることがあれば良いと色々調べましたが、中々ありません。しかし、本日は私の調べた中で1時間程、皆さんにお話をしたいと思います。

下夕張鉄五郎(テッピリア)



まずは何といても文化人であった、下夕張鉄五郎をご紹介します。鉄五郎は、安政4年に松浦武四郎が書いた「夕張日誌」に初めて名前が出てきます。その日誌は、蝦夷地取調べのために武四郎が来道し、夕張川近辺を調査した時の記録です。鉄五郎は、『テッケ』という名前が出てきます。武四郎はこの調査の時に、4人のアイヌの人を案内人として雇っています。それは、シリカンチュウという70歳の男、ヤエタルコロ26歳、アフンテクル24歳、アシュイトの4名です。この中のヤエタルコロという人物が特にテッケと綿密な間柄であったことが分かりました。

さらに、「石狩土人惣取調書上帳」の中には『テッケ』の名が、『ウタレハタ』としても出てきます。元服の様なもので、少年の名前から、大人の名前に変わってきました。そして、その妻シュツカヲクは、ヤエタルコロの妹にあたります。鉄五郎はヤエタルコロの妹と結婚をしたのです。もしかしたら、ヤエタルコロは当時21歳であったテッケを、同じ年齢の妹と結婚する信頼できる男として、武四郎に紹介したのではと思いましたが「夕張日誌」にはそれは見当たりません。慶応元年(1865年)の石狩土人惣取調書上帳にはウタレハタが、当時、下夕張から江別太に転居したとされていますが、その理由を少しお話しします。

明治2年に函館戦争が終わり、明治新政府は、北海道の地をロシアの侵略から守るとともに、開拓を進めようと考えました。新政府にはお金がなかったため、各藩や神社、寺などに募集をして、割り当てにより治めることとしました。早速、高知藩が申し入れをしたところ、新政府は、千歳郡と勇払郡と夕張郡の3郡を高知藩に割り渡しました。同時期、泉麟太郎のいた角田藩も、石川源太という37代目藩主の名義で、今の室蘭を割り渡されました。さて、高知藩は早速、開拓を進めるべく人を集め、役人10名、人夫・農民60名の計70名が参加しましたが、そ

(2007.3.31 北海道栗山町まちづくり推進課)

の募集を進めている間の10月末頃に、岸本円蔵という男を、千歳、勇払、夕張3群の引き渡しに向かわせました。千歳郡と勇払郡は、当時、その地を管理をしていた、黒沢伝之丞という男から確かに受け取ったようですが、夕張郡に行こうとした所、雪が深くて行くことができなかったという報告書が残されています。千歳市史には、「支配地内に開拓移民74名を送り、費用も5万両支出した。」と書かれ、由仁町史にも、「明治3年、石狩・胆振3郡に70人を送って、開拓費5万両を支出したが、夕張郡には入らなかった」と書かれています。

高知藩は夕張郡には入ることができませんでしたが、その意志はあったと思います。その理由として、高知藩は「夕張郡内のアイヌの人々を全て他所へよけて欲しい」と、開拓使に申し出たらしく、開拓使は明治3年8月、「同所土人他郡へ転居申付」の布達を出し、これによって出て行ったアイヌの人もいれば、残った人もいた様です。その時、当時、ウタレハタという名であった下夕張鉄五郎は、江別太に転居したようです。その直後に、『ウタレハタ』から『下夕張鉄五郎』という名に変わっています。

明治5年、開拓使はアイヌの人の中で和人の言葉、つまり、日本語を話すことができる、比較的若い世代のアイヌ人に和人教育をしようと、東京に計35人を連れて行くことにしました。石狩と札幌からは15人の人が行きましたが、この中に、彼は『下夕張鉄五郎』として始めて和名の名前で出てきます。もう一人、『アブンテクル』も『上夕張安次郎』という名前で出てきます。前述の松浦武四郎が、夕張川近辺を調査したときに船を漕いだ人物です。

鉄五郎は1年数ヶ月、東京で暮らしました。今の東京タワーの根元にある増上寺で、習字や読み方を学び、さらに、約3km離れた青山で農業、牧畜を学びました。麻布、六本木、赤坂と今の首都の中心地を歩いたこととなります。このことが、前段、私が下夕張鉄五郎を「文化人」と紹介した理由です。この35人は和人しかいない初めての土地での生活で恐れを抱いたことでしょう。逃げ出した人、途中で亡くなった人も出ました。そして、開拓使が彼らの意向を確認したところ、15人の中では、帰りたいという人が6人、下夕張鉄五郎もその一人でした。一時帰省したいという人が5人、そして、東京に残りたいという人は一人しかなく、3人は亡くなってしまいました。

でも、なぜアイヌの人の教育所を東京芝の増上寺に置いたのか。この寺は徳川家康の菩提寺です。戊辰戦争で官軍側は朝廷(天皇)のもとに徳川幕府を倒す戦を起し、函館戦争が終結して官軍側の勝利で終わりました。その後、薩摩藩士の黒田清隆が北海道開拓長官になりましたが、彼は、徹底的に徳川家の時代を変えるため、増上寺を彼らの教習場にしたのではないかと推測します。この開拓使仮学校は2年後の明治7年6月に終わりを告げました。

最後に、彼はなぜ「下夕張鉄五郎」という名になったのか、調べましたが不明でした。ただ一つ、『長沼町九十年史』の中に、3つの説がありました。一つは「寛政の頃からの知行主、松前鉄五郎と土地の名、下夕張を組み合わせたもの」、二つ目は「夕張炭山の発見者としての功労から、明治天皇がつけた」、そして、最後は「泉麟太郎が名づけた」とする説です。しかし、一つ目の説の寛政最後の年は1800年、鉄五郎が生まれたのは1835年です。これは如何でしょう。二つ目の説の夕張炭山を発見したのは、開拓使が雇ったアメリカ人技師ライマンの弟子であり、明治21のことです。これは違います。最後の説でも、泉麟太郎と鉄五郎が出合ったのは明治21年のことであり、どれも矛盾があります。

その後、鉄五郎は、現在の角田市街の夕張川向いで丸木舟を持って生活していましたが、明治34年に由仁村伏古に転居し、同39年7月15日に70歳で亡くなっています。その時に鉄五郎の子どもたちは家を焼いています。これはアイヌの人々の風習であり、亡き人のために死後の世界に住む家を持たせるというものです。明治4年10月に開拓使はその風習を禁止しましたが、長年の風習はすぐには廃れませんでした。平成4年10月、鉄五郎の3女ドンミサンの玄孫に当たる方が、開拓記念館に見えました。

浅野幸七郎 夫妻

町史には、下夕張鉄五郎が室蘭から来た角田藩の移住者を、アノロに丸木舟で渡したと書かれています。それでは一番最初にアノロの地を踏んだのは誰なのでしょう。移住団員は22人、その中の浅野幸七郎夫妻は、

(2007.3.31 北海道栗山町まちづくり推進課)

幸七郎 35 歳、妻・志宇 26 歳でした。幸七郎は、角田藩から室蘭に移住した後、明治 10 年には開拓使の農業伝習所で訓練を受けました。そのため、明治 21 年、室蘭からアノロに移ってくる時に、移住団の開拓現場頭取に推された人物です。5 月 8 日に室蘭を出発し、同 11 日にアノロの対岸に到着しましたが、雪解け水により渡ることができませんでした。6 日目ついに渡ることになりました。その時の舟は、右(図一1)の様な舟なのです。この図の写真は長沼町で発見されたアイヌの丸木舟です。恐らく、これがその当時の鉄五郎の舟に最も近い物ではないでしょうか。雪解けの川の中をこの様に小さな舟で渡るのです。妻・志宇は



(図 1)長沼町で発見された丸木舟

考えました、「自分の主人が一番最初に渡るべきであろうが、万が一、頭取である主人が亡くなった場合、この開墾組合は成功出来ないかもしれない。そして、代わりに長男の息子が渡るとして、息子がなくなると浅野家は断絶してしまう。一番影響のない私が渡ろう」と意を決めました。無事に渡り終えた志宇は、地に手をつけて神に感謝したということです。こうして、現在私達が「開拓の祖」と呼んでいる、泉麟太郎翁や、同志の人々がアノロの地に入植したのです。

林梅五郎



さて、次に明治 21 年に開拓が始まった時、その近辺には、誰も人はいなかったのでしょうか。そのことをお話します。明治 34 年 7 月に北海道庁が出した殖民公報に「明治 20 年…山口県人林梅五郎等同志 20 余戸始めて同村アンルルの地に入り開墾に従事す」とあり、「翌 21 年胆振国室蘭郡輪西村に在りし旧仙台藩角田の人泉麟太郎等同志数輩と共に来たりて、同地を踏査し…」とあります。泉麟太郎翁よりも、林梅五郎の方が早く入ってきたことは、角田村も北海道庁も認めていたのです。

それでは、本当の「開拓の祖」は梅五郎になるのでしょうか。しかし、明治 21 年に梅五郎が入ったアンルルという地は登川村、今の夕張市だったのです。その後、明治 30 年 7 月になって角田村に境界変更されました。林梅五郎は開拓の祖ではなくとも、「嗚矢(こうし)の人」と言って良いのではないのでしょうか。その後、梅五郎は、明治 35 年に安平村の停車場駅舎建設に寄附をし、同村に移住して、村会議員なども勤めた後、昭和 7 年に亡くなりました。

渡辺大助



夕張側には、林梅五郎が入っていましたが、もう一人、今の栗沢側にも入っていた人がいました。それが渡辺大助です。彼は旧水戸藩士であり、北辰一刀流免許皆伝、さらに、柳生新陰流の奥義を極めていた人物であり、明治 14 年から今の三笠市にあった市来知収治監の看守を勤めました。正式な看守として高い位置にいたようです。囚人が逃亡すると屈足(くつたり)を越えて、良くハサンベツ地区までは来ていたようです。町史によれば明治 21 年 3 月に、看守の職を辞して附近の農家で訓練をし、

堅雪の上を橇を引き進み、今の雨煙別北岸に入地したとされています。しかし、それでは 3 月に退職してすぐに入地したことになります。いつ農業を学ぶ時間があつたのでしょうか。このことについては、栗山町開拓記念館の森若一治先生が調査をされて、正式には明治 20 年 3 月に退職されたことが判っています。

その後、明治 25 年 3 月に、ハサンベツの入口に教授場を設け、子弟の教育を始めています。明治 29 年に、

(2007.3.31 北海道栗山町まちづくり推進課)

岩見沢、栗沢、角田、由仁、長沼で、帝国製麻の製線工場の誘致合戦があった折には、渡辺大助は自らの土地を寄附しました。それにより、帝国製麻の工場は角田村に来ることになりました。渡辺大助は、角田村の発展に大変な貢献をされた方なのです。しかし、当時、ハサンベツ地区や、桜丘、雨煙別、鳩山などは栗沢村でした。明治39年4月に角田村に編入されたので、彼もまた、開拓の祖ではありませんが「嗚矢の人」であったと思います。大正5年5月に亡くなりました。

泉麟太郎



いよいよ、泉麟太郎のお話です。言うまでもなく、偉大な人物であります。角田藩の添田家に生まれ、慶応元年戊辰の役で敗れ、北海道室蘭に武士集団として移住しました。明治3年4月に室蘭に到着しましたが、明治5年9月に開拓使の通達で士族から平民に落とされてしまいました。失意のどん底を味わったことと思いますが、一致団結だけは欠かしませんでした。平民に落とされたために、開拓使からの移住に係る補助や給与、開拓費の貸付なども切られてしまいました。生活困窮により、若い人を連れて中山峠、本願寺道路の土木工事に行ってお金を稼ぐなど、本当に辛い年月を過ごしました。兄の添田龍吉と同地の輪西(わにし)で塩や氷、そして網をつくるなどして、移住者たちの生活を支えました。明治17年には室蘭郡の戸長や警察署長にもなりました。そのような真剣な姿が認められたのだと思いますが、明治18年12月に移住家臣団が、もう一度、士族に編入されました。その時、麟太郎たちは「士族同盟」という、自律自戒の同盟を結びました。これは、後に重要な意味を持つてくる同盟であったと私は考えます。

しかし、室蘭の土地は狭く、室蘭郡長古川浩平の「夕張郡は肥沃な土地である」との言葉により、アノロへの移住を計画。明治21年5月3日にまず、泉麟太郎、氏家、田中の3人が先発し、そして、5月8日には第2陣の22人が出発しました。5月16日に無事、下夕張鉄五郎の舟でアノロ川を渡り、この地に入り、その翌日から開拓が始まりました。開拓の2年後に角田村が設置され、さらに、その翌年には、日本の稲作の第一人者であった北海道庁の酒匂(さこう)財務部長の指導援助により、稲の試作にも成功し、北海道で初めての水利土功組合を組織し、夕張川から水を引いて稲作を振興し、角田村の基礎をつくりました。明治32年にはそのことが発端となり、北海道拓殖銀行法、さらには北海道土功組合法が制定されました。

泉麟太郎は大正6年に角田村開村30周年をおえ、村長、道議会議員を歴任し、88歳で亡くなりましたが、亡くなった時の除籍簿を見ると「昭和4年1月8日午前7時40分死亡」と書かれています。しかし、当時の新聞各紙の死亡広告では7日とされており、北海タイムスの記事だけが8日となっています。さらに、時間は全紙が午後7時40分となっております。町史には、除籍簿と同じく1月8日と記載されています。さて、この日時の違いは何なのでしょう。泉晴男先生にお願いをして調べてもらった所、当時、収入役であった国広貞吉の日記の中に、「1月8日朝6時、今まで遺骸の傍に付き添い、通夜をして帰宅した。布団に入ったけれども寝付かれず。」という意の文章が見つかりました。結論として、亡くなったのは7日午後7時40分であることが判りました。当時の役場職員の失意と困惑が見てとれる思いです。(図-2)の写真は大正6年の開村30周年記念の時のものですが、次のお話は、その写真の泉翁が手にしている扇のことから始まります。



(図 2)大正6年 開村30周年時の泉翁

高木兼寛

(図-3)の扇にある「開荒施澤」とは「荒れるを開きうるおいをのばす」という意味を持ちます。「大正6年9月吉日、穆園(ぼくえん)」と書かれております。泉翁の手にしていたこの扇子の文字から、次の人物のお話に移っていきます。その人物は男爵、高木兼寛です。明治25年に北海道庁の職員の薦めにより、角田村を訪れ角田、共和、大井分、三日月、杵臼、中里、雨煙別にあわせて250町歩の土地を確保し、水利組合の結成にも賛同して、その工事資金を日本勧業銀行から借り入れる時に、東京で大きな力を発揮しました。常に泉麟太郎翁を励まし続けた人物であると町史に書かれてあります。この方は宮崎県の穆佐村(むかさむら)にて、高木喜介という大工の子として生まれました。栗山町史では旧薩摩藩士族と書かれていますが、いつから士族になったのかは定かではありません。戊辰戦争の時に、薩摩藩の医師として倒幕に参戦しており、福島県二本松近辺で、阿波藩医の「奥羽出張病院頭取」関寛斎という人に会っています。後にお話しますが、この「関寛斎」という名前は記憶に留めておいてください。



(図 3)扇子「開荒施澤」

明治3年に鹿児島島の医学校の教授となって、その後、イギリスに国費留学し、そこで医師と大学教授の資格を取っています。そして、明治17年に海軍医務局長になりました。そのとき、日本の海軍軍艦の一隻が練習航海のため、ニュージーランドからチリ、ペルー、ハワイを通過して帰ってくる航海に出ていました。それは「龍驤」という軍艦であり、乗組員378名。しかし、航海の中で、どんどん脚気患者が増え、最後、ハワイに寄港したときには150人が患っており、さらに、その内の23人は死亡しました。ハワイからやっと届いた海軍省への電報は、「病者多く航海できぬ、金送れ」というもので、そのとき、海軍医務局長であった高木兼寛は考えました。自分が留学する時の、イギリスまでの片道2ヶ月の航海では、船内で誰一人脚気を患った者はなく、イギリスではそもそも脚気という病気が存在しなかったのです。高木の徹底した調査と研究の結果、白米とタクアンを止め食事を変えることにしました。大蔵省の猛反対を受けましたが、総理大臣の伊藤博文に頼み込み、明治天皇に単独で面会する機会を得ました。それが認められ、麦飯とパン、肉・魚、野菜の食事に切り替えました。翌年、海軍の練習艦「筑波」が同じ航路を辿った時の、ハワイからの電報は「病者一人もなし、安心あれ」というものでありました。これで海軍から脚気は無くなりました。高木は海軍軍医総監になっていました。一方、同時期、陸軍では森林太郎(鷗外)が軍医総監でしたが、「脚気は、ばい菌が原因である」とし、「兵舎や軍艦の中を清潔にすれば脚気は起こらない」と考えていました。

高木兼寛は、その功が認められ爵位「男爵」を授けられました。明治37年に日露戦争が勃発した時、当時の日本陸軍の総勢が110万人で脚気患者が21万人、さらに脚気が原因で死亡した軍人が2万8千人であったのに対して、海軍の脚気患者は軽症のものがわずか数名であったとのこと。そして日本海大海戦で、日本海軍はロシアのバルチック艦隊に勝利し、ロシア艦38隻中わずか4隻が逃げ得たのみの大勝利でした。大海戦



の表の功労者は東郷平八郎ですが、陰の功労者は高木兼寛であったと言えます。高木兼寛は明治40年9月には、ご夫婦で角田村に来ています。そして、その時に、角田村仏教同士の会の依頼により講演をしています。これは、有松準太郎先生の書かれた「栗山発達誌」の中にあります。その後、兼寛は72歳で亡くなりましたが、息子の高木喜寛に角田村の農場を含む家督を継いでいます。その喜寛に土地を寄付してもらい、今の雨煙別神社が建っています。

實吉安純



もう一人、薩摩藩士の人物に話を移します。實吉安純は、鹿児島医学校を卒業した後、海軍省に入って、高木兼寛の後を追うようにイギリスに国費留学をし、海軍省軍医総監に昇進した方です。貴族院議員にもなっています。明治40年日露戦争の勲功で「子爵」の爵位を得ています。

彼もまた、高木兼寛同様に明治25年に角田村の中里に土地を取得して、弟に農場経営を任せていました。明治26年には角田村を訪れ、真成社に加盟し、角田村、長沼村の発展に多大な貢献をされた方です。

そして、海軍軍医総監を辞したあとは、兼寛のつくった慈恵医大の教授となり、さらには学長を務め、昭和6年に亡くなりました。彼もまた、角田村に資本を投じた一人でした。

湯地定基



最後に、もう一人の薩摩藩士のお話です。湯地定基は、今の湯地農場の基礎を作られた方ですが、薩摩藩の医者の子として生まれました。彼の妹にシヅという女性がありますが、その方は、日露戦争の時の乃木大将の妻です。湯地定基は、米マサチューセッツの農業学校に留学をしました。後年、国家に功績があるとのことで、内閣の推薦により勅選の終身貴族院議員にもなっています。

その息子さんに定彦という人がいますが、その方は、明治36年に角田村の土功組合が杵臼、阿野呂、下角田の水路開削の費用を要した時に重要な役割を担った方です。当時、ちょっとした手違いのために、日本勧業銀行の融資が暗礁に乗り上げそうになりました。泉麟太郎と福井正之が急遽上京し、京橋の高木兼寛宅に相談に行きました。すると兼寛は、そこに北海道長官の園田安賢を呼び、さらに、日本勧業銀行の貸付課長も呼んで相談をしました。その結果、日本勧業銀行の監査役を現地に派遣し、その結果が良ければ融資を決定することとなりました。明治36年5月11日、角田村に監査役が到着しました。その監査役の名は「湯地定彦氏」、現地調査の結果、一件落着きました。この湯地定彦さんは、大正6年日本勧業銀行を退職、角田村に来て湯地農場を運営しました。それが今に続いているのです。

まとめとして 開拓時の先人たちが持っていた精神「武士道」

戊辰戦争の時、角田藩は幕府側で敗北しました。それでは、なぜ、官軍側の薩摩藩士たちが、負けた側である旧角田藩士を応援するように広大な農地を購入し、農場を経営したのでしょうか。私は、栗山町に来たときからそれが不思議で仕方ありませんでした。先ほどの3名の薩摩藩士の他にも、湯地農場の管理者から、現在の森地区を開いた森啓蔵、そして、やはり官軍側であった岡山藩支藩、勝山藩士の鳩山家も来ました。佐倉藩の堀田家についても同様です。先ほど名前が出た、関寛斎という人物は、現在の陸別にある関神社に奉られている人物であり、二本松での戦いにおける、「賊徒掃攘」の勲功で金100両を行政官より下賜されたという記録が残っています。戊辰戦争で負けた幕府側の藩士たちは、つまり「賊徒」であり、泉翁をはじめ角田藩士たちは「賊軍」であったのです。なぜその「賊徒」たちに戦役後幾ばくもしない時期に、官軍側であった人々が資力を投じたのでしょうか。

そこに、私は泉麟太郎と同志が組織した士族同盟の存在が関係しているのではと考えます。麟太郎翁を中心とする角田の開拓団の、「武士の襟持」を守って生きる姿が信頼を得たのだと考えます。士族同盟の規約にある様に「節義を守り、廉知を尊び、家産を励み、節儉を励む、師弟を就学せしめ人材を養成する」などの自律自戒による武士の生き方を貫いたことが、貴族である彼らとの信頼を生む基盤になったのだと思います。そして、それは古来からの『武士道』(※資料P29-30を参照)を守ることによって培ってきた日本の道徳精神です。『武士道』とは日本人にとって古い道徳規範ではなく、現在も行われなければならない『道徳』そのものであると考えます。私は偉大な先人・偉人を持つ栗山町にいることを心より感謝して本日のお話を終えたいと思います。

意見交換(自由議論)の要旨 (第1回)

- 本町入植の生活困窮の中でも、まず最初に「教育」に取り組んだ先人たちに感銘を受けた。簡易的教習所をつくり、渡辺氏は私財を投じて子ども達に教育の場を与えた。その先人たちの行動が文化度を高め、今の町の個性につながっているのではないかと。
- (横田講師)日本人の素晴らしいところの一つではないか。戦後、多くの人たちが北海道に開拓に入り、まずは生きていくこと、そして次には、心の拠り所ともなる神社をつくり、そして次には、子どもたちへの教育の場「学校」をつくってきた。それ以前の寺子屋の時代から、日本人は次世代の教育には非常な情熱を傾けてきたと思う。
- 町の歴史の深さを知らずにいた。本日のお話と栗山町の先人の偉大さに圧倒された。
- 明治期に栗山町の農業生産基盤に多大な貢献をなした、官軍側の貴族(薩摩閥)たちが、本町に大資本を投じたということであるが、それは道内でも稀なことであったのか。
- (横田講師)虻田、共和町など、他にも士族が投資した町はあると聞いているが、開拓移民団に貴族階級の資金が投資された事例はあまりないのではないかと。
- 長沼町や早来町、雨竜町にも、貴族階級の資本が投資されていた。
- (横田講師)しかし、本町のように、本州数県から複数の貴族が投資した地域は道内では稀であると言えます。
- 本日のお話をお聞きして、さらに深く町の歴史に興味を持った。
- まだ、栗山町に住んで2年、自分でも若干、町の歴史を調べたことがあった。本日のお話は自分にとっては難しいと部分もあったが、大変勉強になった。
- 私たち若い世代も、この地域に生まれ育って、町の歴史を知らないことに恥ずかしさを感じた。町の歴史を知ることの意義と楽しさを自分たち、これからの子どもたちに伝えるべきと感じた。
- 武士道を生活の規範とした開拓者達の精神が、本州の大資本を呼び込んだのではないかと、というお話もあったが、やはり、本町の開拓者たちが信頼のおける集団であったと共に、北海道開拓使との連携も含めて、交通も不便な時代に「行動してきた(動き)」ことも重要な要素であったと思われる。
- 現北大の「学田」があったことも、開拓使との関係に役買っていたのではないかと。同一作物を多角的に栽培する試験的な要素があったが、理由なしにこの地域に来たのではなく、この地域の土壌などの特性によるものかと思う。
- (横田講師)高木男爵が最初に栗山町に資本を投じたが、町史に、「道庁の係員の薦めにより」と記載されている。開拓使の幹部であった、酒匂(さこう)財務部長という人物がほぼ同時期に着任しており、稲作の第一人者であったということである。町の先人たちの情熱により、現在の道庁にあたる開拓使との人脈を築いていたことも推測されるのではないかと。
- 開拓の祖、泉麟太郎さんの行動に非常に関心があるが、本州から藩職人など様々な職人を招くことで産業を形成したと聞いたが、それが、栗山町の現在の産業形成に関連があるのではないだろうか。
- 栗山町に入る前に現在の室蘭市にまず入植した時に、既に養蚕業に取り組んでいたことも一つの背景になっていたであろう。桑の木が多いことから利用したということである。
- 明治20年代、現在の七飯町や北広島市において、稲作が行われていたが、アメリカの有識者などが現北大に招かれ、「北海道に稲作は向かない」という見解であった。しかし、先ほどの酒匂財務部長の就任時期と同時に、稲作が始まった栗山町は、正にその時代北海道の稲作の始まりと言っても良い。
- 泉麟太郎翁の苦労はあったが、翁一人の力ではなく、栗山町には多くの偉大な人たちがいてそれぞれに町の発展に貢献した。その彼らがお互いを尊重し、協力し合っていたことが素晴らしいことである。現在を見ても尊敬す



(2007.3.31 北海道栗山町まちづくり推進課)

べきことではないだろうか。

- (横田講師)大資本を投じた方は多くいたが、湯地家だけが栗山町に籍を残して今に至っているのは、昭和 23 年の農地解放により大資本の形態がなくなったためです。
- 栗山町は、全道で最も早く土工組合を結成し、灌漑を整備して水田地帯を広げていった。それは栗山町の先人たちの偉大な精神のあらわれであり、それが今の栗山町民の人材の基礎になっていると思われる。志の高い先人を持ったことが栗山の財産である。
- 最近、「武士道」に関心を持っていたが、まさに、その精神が栗山町の先人たちから受け継がれていることを聞き、この栗山町に生まれ育って良かったと思えるお話であった。今後は、それをどう次世代の子どもたちにつなげていけるかが重要ではないか。

まちの「教育」につなげる観点から

- 町に愛着と誇りを持つ、選択的定住民を育むことはまちづくりの基礎を成す普遍的な要素である。そして、その精神は、「行動をとおして伝えていくこと」が重要である。
- 歴史とは過去と現在の対話であり、現在が未来への起点であれば、栗山町 120 年の歴史は、新しい世代が次の時代を切り開くための無限の宝庫である。
- まちの先人・偉人が持っていた『武士道』は現代に通じる道德規範であり、現在・未来に引き継いで行くことが必要である。それが、現在の「いじめ問題」などに象徴される教育問題の根本をなすのではないか。